

クラリッサの死と文書化

久野陽一

もし、終わりというものがある初めて、小説全体が形式的、時間的に調和した構造をとることが可能になるなら、あるいは、その全体が全体として何らかの意味をもつために終わりが必要とされるなら、⁽¹⁾ サミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson) の長大な小説『クラリッサ』(Clarissa)⁽²⁾ において、ヒロイン、クラリッサ・ハーロウ (Clarissa Harlowe) の死をめぐる問題を扱うことは、その終わり方を通してこの小説全体の意味を問うことである。全体が手紙で構成されるこの小説は、「不断の闘争の場」となる契機をすでに包含している。⁽³⁾ というのは、容易に分割可能な書簡の無数の断片において、それを特徴づけるのは、差異であり、分断であり、境界であって、そして、それらのあいだに内在的な無数の力関係としての権力の関係が生じるからである。そこにおいて、クラリッサの死は、彼女とロバート・ラヴレイス (Robert Lovelace) とによる、この小説の最も重要な力の対立の関係の結末、終わりとして、そのなかにすべての力のせめぎ合いを回収してしまう一本の強力な線分を引く。そこに、他をすべて一元的にまとめあげてしまうような、大きな力の運動を認めることができるのである。この二人で小説全体の大部分の手紙を書いているがゆえに、彼らの対立関係は、手紙と手紙、文書と文書という言説の対立の図式として表象される。クラリッサは、ラヴレイスに誘惑され、凌辱された後、ひたすら自らの死を望み、その準備を開始する。そして、実際に彼女の肉体はどんどん衰弱していき、ついに死んでしまう。しかし、この死に至る過程において、今度は彼女の側の言説の方が大きな力をもつことになるのである。この小説を、ヒロインのハッピー・エンドに終わらせるべきだという読者からの要望に答えて、作者リチャードソンは次のように述べている。

Who but the Persons concerned, should choose for themselves, what would make them happy? — If Clarissa think not an early Death an Evil, but on the contrary, after an exemplary Preparation, looks upon it as her consummating Perfection, who shall grudge it her? — who shall punish her with Life? ⁽⁴⁾

クラリッサの死は、「模範的な準備」をした上で「完成すること」を意味する、と作者は弁明している。死において完成を達成するということは、一つにはキリスト教徒の完成のモデルに彼女の死を従わせ、そこに宗教的な言説の導入を許している。⁽⁵⁾ そして、彼女の言説がそれまでにもっていなかった新たな権力を手に入れ、それまでの様々な力の錯綜する関係に決定的な終わりをもたらすのは、まさにこの宗教的な完成としての死への準備作業においてなのである。

ここでいう死への準備とは、結果的に、四種類の文書を作成することである。そして、それらのクラリッサの死の文書は、この小説の手紙の言説とは質が異なるがゆえに、それらから容易に切り離され、分割され、区別される、突出したものであり、特権化された絶対的な力をもって、それまでのラヴレイスとクラリッサの権力関係を逆転させるための最も有効な手段とされるのである。こうしたクラリッサが死ぬまでに作成する四つの文書とは、以下のようなものである。(1) 彼女が死後、自らの肉体をそこにに入れるために、わざわざ注文して作らせた柩。(2) 聖書からの引用によって構成された宗教的瞑想の記録。(3) 家族を始めとする親類や知人たちに、彼女の死後送られる11通の手紙。(4) クラリッサの遺言書。これら四つの文書は、その他の手紙とは違った価値をもって現れ、他の人々によって、特別なものとして扱われることになり、この小説全体の解釈をも十分に支配してしまうだけの力を発揮する。クラリッサが死ぬことによって手にいれる権力とは、主にこれらの文書による、それまでに起こったことに関する意味づけ、解釈、コンテキストの固定化のことである。つまり、彼女は、それまでに自分に振りかかった事件、ラヴレイスによる凌辱を最悪の例とするような自分の不幸のすべてを、そのなかに封じ込め、彼の側から

は何の反論もできないように、その意味や解釈を固定化し、そして、そのような事件によって彩られたこの小説全体の物語をも総括してしまおうとするのである。新たに事件を引き起こすことによってではなく、(確かに死という事件を起こすわけなのだが)すでに生じてしまったことの解釈の方を操作することによって、⁽⁶⁾ それまでのラヴレイスとの対立関係に終止符を打ち、最終的に絶対的な勝利をもってこの小説を完結させることなのである。⁽⁷⁾

そこで、以下では、このようなクラリッサの死の文書を中心にして、彼女の死がどういうものであったか考えていくことにするが、文書の具体例を見てみる前に、彼女にとって死とは一体何であるのか、彼女による死の定義づけを見ておきたい。クラリッサは、文通相手のアンナ・ハウ (Anna Howe) への手紙のなかで、次のように問いかける。

What then, my dear and only friend, can I wish for but death? —
 And what, after all, is death? 'Tis but a cessation from mortal life: 'tis
 but the finishing of an appointed course: the refreshing inn after a fatiguing journey: the end of a life of cares and troubles; and, if happy, the
 beginning of a life of immortal happiness. (1117)

この言葉から読み取れるのは、クラリッサにとって死とは、「停止」あるいは「終わり」であると同時に「永遠の幸福の人生の始まり」でもあるということ、死ぬことによって、現実の生に対する精神的で霊的な生命を手に入れる、すなわち始めることができるということである。生命の終わりを開始に転換することによって、彼女は、通常の時間の概念からの脱却を示そうとしている。このことは、彼女の死が明確に宗教的なコンテクストを導入していることを意味し、その結果、その過程で準備される文書の数々も宗教的な精神性に満ちたものになってしまうことを示唆する。他の手紙が日付と時間が記され、通常の時間の枠組みのなかに位置づけられるのに対して、彼女の死の文書は、たとえ日時が記されたものであっても、現世的な時の流れから逸脱し、永遠という来世的な時間性のなかで取り扱われるべきであると主張しており、それゆえにそれらの

文書を、他の書簡が形作る現世的時間のコンテクストから個別的に取り出して考えることが可能になるのである。

クラリッサの死への準備は、こうした永遠の時間への移行のためのものであると考えられる。しかし、クラリッサの死を志向する態度が来世にのみ関心を示し、全く自らの肉体に無関心であると考えるのは正確ではない。彼女の死の文書の一つめとして挙げた柩は、まさに自らの肉体のためのもの、あるいは死後自らの肉体までも一種の文書と化してしまうよう考案されたものだからだ。P. M. スパックスによると、死を目指すクラリッサの新たな自己の定義づけは、来世的なだけでなく、特に「非性的」であるという。⁽⁸⁾ 彼女は、肉体性を否定し、自分自身を純粋な魂とし、肉体的関心を柩を手配することに集中させる。そして、彼女が取るに足らないという存在である肉体は、深遠な象徴へと変形する。柩は、彼女の肉体までも一つの文書のなかに取り込んでしまうのである。

クラリッサがラヴレイスの手を逃れた後に身を寄せたスミス (Smith) という手袋職人の家を訪れたジョン・ベルフォード (John Belford) の報告によると、この柩はふたの表面に、次のような趣向がなされていた (1305-06参照)。まず、中心的な装飾として、白いメタルの上に刻まれた王冠をかぶった蛇の紋章。この蛇は、自分の尻尾をくわえて輪になっており、永遠 (eternity) の紋章とされる。その輪のなかに、クラリッサの名前と、4月10日という死すべきときの日付 (これは、実は彼女が自分の家を脱出した日付で、死すべき日として自分で定めたものであって、実際に死んだ日付ではない)。さらに飾りとして、一番上の部分に翼のついた砂時計、一番底の部分には壺の絵。砂時計の下にヨブ記からの引用文、壺の上には詩編からの引用文、その引用の上には茎のところで折られた白いユリの花。さらにまたその上に、詩編からの引用文。そして、この柩全体は、白いサテンで縁どられた黒い布で覆われている。

このようなクラリッサの柩は、すでに複数の文書の複合体であり、T. キャッスルの言葉を借りれば、それ自体、何らかの解釈を読者に要求しながらも、意味は「不決定的」であり、「解釈者の数と同じだけの解釈を許してしまう」ような、一つの「不在の記号」(sign of absence) である。⁽⁹⁾ あるいは、T. イーグルトンにならって、「純粋に自己言及的な記号」(pure self-referential

sign) であるといってもよい。⁽¹⁰⁾ クラリッサの柩が、これまでも多くの解釈を生み出してきたのは、この文書のこうした性質による。そして、もしそれが「不在の記号」であり、「自己言及的な記号」であるとしたら、この柩は、彼女の四つの死の文書だけでなく、『クラリッサ』という小説全体で起こっていることについての、一つのメタファーだといえる。あるいは、この柩について、18世紀後半から19世紀にかけて「言語が単なる客体 (object) の地位にまで降格させられた」というM. フーコーと同じ文脈で語りうる。フーコーによると、そのとき文学は、書くという純粋な行為に依拠して存在し、書くという行為の「自動詞性」(intransitivity) のなかに自らを閉じ込め、その言説は、「まるで自らの形式の表現以外に何の内容もないかのように、それ自体に回帰するだけ」であり、「書く主体性としての、それ自体に問いかける」だけである。その結果、言説は、表象から切り離され、分散されてしまう。⁽¹¹⁾ 『クラリッサ』という書く行為に固執し、それが前面に押し出された小説のなかにあって、クラリッサの柩は、謎めいた暗号であり、解釈しようにも、明確な意味を持つことを頑なに拒み、常にそれ自体の形式へと回帰するだけである。そのいくつかの断片に分散された文書は、彼女が死後そのなかに入ることによって、今は亡き、書く主体としての彼女を空しく指し示すだけでしかない。こうして、彼女の「不在の記号」は、この小説全編を通して展開される「書くという試みの小宇宙」⁽¹²⁾ となるのである。

しかし、その後この小説のなかで、クラリッサの柩の他の人々からの扱われ方を考えた場合、あらゆる意味が回避されるどころか、ある一つの意味にだけ解釈が限定される場所に、この柩がもつ他の死の文書と共通した特徴が認められる。それは、三箇所(聖書からの引用という、唯一出典が明らかな部分によって引き起こされる効果である。それらの引用文があることによって、この図案を宗教的寓意をもって読むことが可能となるというより、むしろ、それは宗教的な文脈での解釈へと盛んに解釈者を誘導しようとしているかのようなのである。このことは、クラリッサ自身によるこの柩の扱われ方からもいえる。ベルフォードによると、彼女はその柩を自分の「家」(house) と呼び、スミス家の自室に「あたかもハーブシコードのように」置き、「机かテーブルでも

あるかのように、その上で読んだり書いたりする」(1316)。周囲の人々が、そのようなものはどこか目につかないところへどかしておくように頼んでも、彼女はそれを拒む。なぜなら、それは彼女に「慰みと元気を与えてくれるから」であり、また、家族や旧知の人のいないところで死を迎えようとする、孤独な彼女にとって「必要な準備だから」(1317)であると彼女は答える。さらに、この柩は、後に彼女の遺体をなかに入れることによって、彼女の宗教的な精神性のシンボルのようなものになる。次の引用は、クラリッサの葬儀の参列者の一人がその柩に対して示した反応である。

When they came near the coffin, and cast their eyes upon the lid : 'In that little space, said Mr. Mullins, is included all human excellence !' — And then Mr Wyerley, unable to contain himself, was forced to quit the church ; and we hear is very ill. (1408)

葬儀に集まった群衆の喧騒のなかで発せられた、彼女の柩のなかに「人間の美德のすべてが包み込まれている」というこの言葉は、それが他の人々に与える象徴的な効果の一端を示しているとともに、それが社会的に公認されたクラリッサおよびその柩の解釈であることも教えてくれる。

このような柩の重要さは、それが、この小説におけるクラリッサとその死の文書全体の展開をも象徴しているという点にある。まず、それは不在の記号、自己言及的な記号であるがゆえに、意味するところは不決定である。その意味を解こうとしても、解釈者の数だけ解釈の数を増やすだけのことでしかない。しかし、この意味の不決定性にもかかわらず、というより意味が不決定であるがゆえに、この柩は、一つの文書として他の人々を誘導せずにはおかない。聖書からの引用が用いられたこの文書は、キリスト教の聖典として聖書のもつ何らかの権力を自らに引き寄せており、そのことによって、解釈者を、明確な意味をもつことなく、宗教的な意味づけの方向へと促す力をもつ。それを目の前にして解釈者は、葬儀の参列者の一人と同じ様に、何らかの宗教的な畏怖の念を抱かざるを得ない。そうして、何か分からないが精神的な力をもったものと

して、それは、彼女の死の文書が他の人々に対してもつ権力を代表するものとなるのである。

クラリッサの柩とともに、その上で書かれた文書も宗教的である。次の例では、聖書からの引用によって構成された瞑想の記録の一つが、ベルフォードによって紹介される。ここでは、彼によってその瞑想録が、それを含む手紙の受け手であるラヴレイスに対して提示されるやり方に注目したい。

Try, Lovelace, if thou canst relish a divine beauty. I think it must strike transient (if not permanent) remorse into thy heart. Thou boastest of thy [ingenuousness] ; let this be the test of it ; and whether thou canst be serious on a subject so deep, the occasion of it resulting from thyself.

MEDITATION

Saturday, July 15

Oh that my grief were thoroughly weighed, and my calamity laid in the balance together ! . . . (1124-25)

ここでベルフォードは、ラヴレイスの心に自責の念を引き起こさせるための試練として、後に続く瞑想録を提出する。クラリッサの瞑想録は、彼女の手を離れて、ラヴレイスに対して、彼を断罪するための具体的な証拠として用いられている。この文書が、彼女の宗教的な精神性とその正しさを客観的に証明するものだからである。この背後には、明らかに、プロテスタント思想における、文書による「媒介」(mediation)の問題が潜んでいる。すなわち、聖書の言語になかには精神性が内在されており、それは、文字化、文書化することを通じて視覚化され、その言語から直接に読み取ることができるという、文書の「直接性」(immediacy)の問題である。⁽¹³⁾ よって、クラリッサの書き写した聖書からの言葉(ここではヨブ記6:2-4)は、目に見えないものではなく、目に見え、実際に手に取って読むことが可能な、彼女の精神性の客観的な証拠として扱われているということになる。

この瞑想録が、キリスト者として死のうとしていた彼女の自省、「完全論」(perfectionism) の手段であることは確かだが、⁽¹⁴⁾ しかし、それがどの程度まで彼女の主体性の表現であるかとなるとかなり疑わしい。それは一見、彼女の内面の精神性を表現しているかのように扱われている。少なくともベルフォードは、そのようなものとして扱っていた。しかし、同時に、その全体は聖書からの引用でしかないのである。クラリッサは、自らの内面を主体的に語っているのではない。たとえ、彼女自身は内面の主体性の発露としてその方法を採用しているとしても、結局、彼女は宗教的なコンテキストによって語らされているのにすぎない。ここで彼女は、好んでヨブ記から引用することによって、ヨブの苦難の物語に、神に対して自らの潔白を主張し、それを死後の解決に委ねるヨブの姿勢に、⁽¹⁵⁾ 彼女自身の境遇を重ね合わせ、同一化しようとする。彼女は宗教的な言説に擦り寄り、身を任せようとしているのである。それゆえに、もしこのような宗教的含意をもつ彼女の死の文書が、何らかの権力を外部に及ぼすとしても、それだからといって彼女自身の内部にそのような力があるとはいえない。もし最終的に彼女の文書が圧倒的な力を示しているように見えても、彼女の勝利をいう前に、その背後にあって彼女の言説を操っている、より大きな力を認めなければならない。こうした問題は、クラリッサの死の文書がより広く周りの人々に受容されるにつれて深刻になる。彼女が自らの死の文書を次々に作成する過程で、皮肉なことに、彼女の主体性の方は、それらの文書によってかえって疎外されてしまうのである。

しかし、自身の主体性のありかを曖昧にしながらも、クラリッサが他に及ぼす力は、より大きなものになることを止めない。クラリッサから正式に承認された彼女の死の文書の管理者となったベルフォードの手に任された遺言書と死後の手紙は、彼女の死後、指示にしたがってその封印が解かれたとき、祔や瞑想録より以上に明確にラヴレイスの断罪を求めるからである。まず、クラリッサの遺言書である。その遺言書の全体は、残された家族や知人たちへの慰めと、細々とした財産の分与のことが記されている。しかし、他の人々には今や慈愛に満ちた言葉が送られているのに対して、唯一の例外がある。それが、他ならぬラヴレイスなのである。彼女は、彼について遺言書のなかで次のように述べ

ている。ラヴレイスが自分の遺体を見たがっても、どうか見せないで欲しい。しかし、どうしても彼が見ると言い張った場合は仕方がない。彼の「残忍な不実の犠牲となったものの亡骸」を見せてやってもよい。でも、彼がそれを見ているとき、「誰か彼に以下の言葉を書いた手紙を渡して下さい」とクラリッサはいう。

... but let some good person, as by my desire, give him a paper whilst he is viewing the ghastly spectacle, containing those few words only: 'Gay, cruel heart! behold here the remains of the once ruined, yet now happy, Clarissa Harlowe! —— see what thou thyself must quickly be —— and REPENT! ——' (1413)

ここで“ruined”とは、一度は「破滅させられた」ことと同時に「貞操を奪われた」ことも意味するが、それにもかかわらず「今は幸福なクラリッサ・ハーロウの亡骸」は、ラヴレイスに恐怖を与えるはずである。なぜなら、彼女のその姿に、彼自身も「すぐにどうなってしまうのか」ということが示されているからである。だから「悔い改めよ!」と、クラリッサは彼に対してかなり強烈な言葉を投げつけている。ただ、この言葉のすぐ後で、「しかし、全世界に完全な慈悲をもって死ぬことを示すためにも、彼が自分にした過ちも許してやろう」(1413)という多少の譲歩を、彼女は示しているが、しかし、それはあくまでも付け足し程度でしかない。というよりも、この遺言書は、多くの人々によって読まれるがゆえに、そのような慈悲を、付け足しほどであれ、彼女は示したのだとも考えられる。なぜなら、ラヴレイス個人に宛てた死後の手紙において、クラリッサは決して彼だけは許さない、彼をその文書のもつ権力で殺そうとするからである。

クラリッサの死後、ラヴレイスに送られた手紙は、次のように書き始められている。

I TOLD you in the letter I wrote to you on *Tuesday* last, that you

should have another sent you when I had got to *my father's house*.

I presume to say that I am *now*, at your receiving of this, arrived there; and I invite you to follow me, as soon as you can be *prepared* for so great a journey. (1425)

ここで、クラリッサが「私の父の家」と呼んでいるのは、死んだ後に行く来世のことを指している。しかし、彼女は遺体としてこの世の父のいるハーロウ家に戻ることもなるので、来世の父、すなわち神の家と現世の父の家という二重の意味をもつ。さらに、彼女は自分の柩のことも家と呼んでいたことから、この言葉は、死んで柩のなかに入れられるということも意味する。こうした多層的な含意をもつ「父の家」に、彼女は今まさに、ラヴレイスが「この手紙を受け取った瞬間に、到着したのです」という。そして、死への「長旅の準備ができ次第すぐに」彼にも自分のあとをついてくるように勧めている。遺言書でも見られたように、ここでも彼女は、ラヴレイスに死ぬことを強要しているのである。つまり、この手紙は、実際には彼女の生きているあいだに書かれたにもかかわらず、彼女の死後、彼に手渡されることによって、ある種の時限爆弾的な効果を発揮する。このクラリッサの手紙は、まさにあの世からの手紙として、この世の者にはいかんともしがたい、この世を超越した何らかの力をもったものとして、ラヴレイスの目の前にたち現れ、彼を死へと誘い込もうとするのである。

この手紙は、さらに、次のように続く。

Not to allegorize further — my fate is *now*, at your perusal of this, accomplished. My doom is unalterably fixed : and I am either a miserable, or a happy being to all eternity. (1425)

自分の運命は、今、彼がこの手紙を読んだときに「完成する」、「不変に確立される」、あるいは「固定される」(fixed) というこの言葉から、この文書の果たしている役割がより明らかになる。このクラリッサの死後読まれる手紙は、

小説全体の他のコンテクストをも固定化してしまう。この手紙は、クラリッサの運命を決定するだけでなく、ラヴレイスの運命をも決定づけてしまうように作用し、それ以外の読みの可能性を拒絶してしまうように、ただ一つの意味に全てを固定化してしまおうとするのである。そして、その結果、クラリッサは「永久に幸福な存在」になることができるのである。

このようにして、クラリッサが死の準備の段階で作成する四つの文書は、彼女の「死の王国における勝利」を確定し、死後もなお他の登場人物に対して支配力をもつことができる。⁽¹⁶⁾ この小説において彼女がそのような支配力を持っているという事実は、それが他の人物にまで波及し、小説全体を死の雰囲気ですべて覆ってしまうことからわかる。この小説の後半では、クラリッサ一人が死んでいくわけではない。彼女の長く緩やかな死に相前後して、その他にも数名の人物の死が配置されるのである。すなわち、ラヴレイスの仲間たち、ベルトン (Belton)、シンクレア夫人 (Mrs Sinclair)、そして小説の本文の最後で伝えられるラヴレイスの死などがそれである。これらの死は、クラリッサの死と著しい違いを見せている。彼女のものが十分に準備のいき届いた、静かで緩やかな死であるのに対して、他のものはいささか唐突で突発的な死であるという点である。特に、ベルトンの悔恨しているが、恐怖に満ちた死、シンクレア夫人の悔い改めもせず、ただひたすら恐怖に満ちたグロテスクな死と、クラリッサの悔い改め、それゆえに希望に満ちた死とが全く対照的なのは、前二者の死が、クラリッサのものとは違って、少しの猶予もない突発的なものであるところに原因がある。⁽¹⁷⁾ たとえば、シンクレア夫人が差し迫る死のなかで、次のように訴える様子から、悔い改める間もなく訪れようとする死の唐突さの恐怖を伺い知ることができる。

How, sir ! What, sir ! interrupting me ; send for a parson ! — Then you indeed think I shall die ! Then you think there is no room for hope !
— A parson, sir ! — Who sends for a parson while there is any hope left ? The sight of a parson would be death immediate to me ! — I cannot, cannot die ! — Never tell me of it ! — What ! die ! — What ! cut

off in the midst of my sins ! (1392) ⁽¹⁸⁾

そして、クラリッサとの対照をなすこれらの死は、より明確にラヴレイスの死を強要するための材料になる。ベルフォードは、ベルトンの死を引き合いに出して、ラヴレイスもまた死すべき運命であるとする。このやり方は、すでに見た、彼がクラリッサの文書で行っていたのと同様の文脈で理解される。

... Lovelace, let this truth, this undoubted truth, be engraven on thy memory in all thy gaieties, that the life we are so fond of, is hardly life ; a mere breathing-space only ; and that at the end of its longest date,

THOU MUST DIE AS WELL AS BELTON. (1224)

しかし、ラヴレイスに関してより特徴的なのは、かつての仲間たちの死に触発されるだけでなく、他ならぬクラリッサによって死へと追い込まれていくという点である。すなわち、彼女の死の文書のもつ支配力で、いわばそれに呪われたような状況で死へと導かれるという点である。彼女の来世からの手紙を読んで以来、それが自分に「くっついて離れない」と彼は告白する。

I am kept excessively low; and excessively low I *am*. This sweet creature's posthumous letters sticks close to me. All her excellencies rise up hourly to my remembrance. (1428)

かつて様々な策略を未来に向けて投げかけていたラヴレイスの姿は、ここには全く認められない。クラリッサの手紙に呪われたということは、彼にとって、過去に、過去の記憶に呪われたということの意味する。彼はもはや新たな事件を引き起こすことはできない。なぜなら、今の彼に取りついているクラリッサの思い出は、彼女の死において、すでに強固に確立してしまったからである。

クラリッサの死の力、この小説のなかで唯一正統であり模範と見なされる彼女の死の支配力は、その後ラヴレイスを外部へと排除していく。これは、空間

においてだけでなく、言語のレベルにおいても外へと向かうことを意味する。クラリッサの死後、彼はイギリスを離れ、ヨーロッパという外部へと逃げ出さざるを得なくなる。そして、その逃亡先まで彼女のかたきを討とうと後を追ってきた、クラリッサの従兄のモーダン (Morden) と決闘して、彼は結局あつけない最期を遂げる。小説の本文の一番終わりで描かれるこのラヴレイスの死は、小説の物語を締めくくるクライマックスとして、かなり劇的な効果を上げることもできたはずである。しかし、彼の死も同胞たちの死と同じく唐突な形でしか現れない。また、クラリッサのように自らの死を周囲の人々に承認され、公的で特権的なものにするべく文書化して示すことができなかつたという点において、彼の死は、彼女の死に決定的に劣る。かつては彼女に匹敵するだけの量と質を兼ね備えていた彼の手紙は、彼女の死後、次第に短くなり始め、彼がイギリスの外部へと地理的に遠隔化されると、その傾向はより一層強まり、その結果、彼は自らの言説を放棄せざるを得なくなるのである。彼の死において、その死を表象する、彼の手による手紙や文書は残されない。そこに見出されるのは、フランス人の従者ド・ラ・トゥール (de la Tour) による彼の死亡の唐突な知らせの、しかも、翻訳したものでしかないのである。このフランス人による手紙は、この小説のなかで、一番最後にただ一度しか登場しないばかりか、唯一の翻訳された手紙であることから、そのフランス語から翻訳された片言の英語による報告の内容を、不決定で曖昧なものにしてしまっている。⁽¹⁹⁾ こうして、ラヴレイスの死をめぐる状況は、その報告に使用される言語のレベルにおいても、外国語からの翻訳という手続きを踏まねばならないという、遠隔化された形でしか提示されないのである。

このラヴレイスの疎外された死をもって、この小説の根本的な対立関係、クラリッサとラヴレイスのあいだの権力闘争に終止符が打たれる。この小説が、その表題にもなっているヒロインの単なる生涯の記録ではなく、一つの「歴史」という「調和した形式」⁽²⁰⁾ となるのは、このかつてはヒロインを迫害した者の死が小説の終わりにくることによってなのである。この『クラリッサ』の終わりは、単に、表題と同じ名前をもった女性の死にあるのではない。確かに、彼女の死も一つの終わりではあるが、しかし、この小説の終末は、そこか

ら引き延ばされた場所で、もう一つの調和した終わりを求める。それが、この小説の本文の最後にくるラヴレイスの死なのである。あるいは、このラヴレイスの死による終わりを、W. レイのいう、悲劇的殉教者の物語として流通した「クラリッサ伝説」の完成ということもできるであろう。そのとき、「クラリッサから『クラリッサ』への変身」、自らを一編の物語とすることを通じて、彼女は殉教者という公的な領域へと接近し、そこにおいて、彼女は「自己 (self) と他者 (Other) とのあいだの相互作用のレベル」に到達する。そして、彼女は、こうした自己と他者、すなわち「現在の私的な語り (narration) と過去のものとして受け入れられた公的な物語 (narrative) とのあいだの弁証法的な関係」に位置づけられることになる。⁽²¹⁾ こうしたことは、これまでに見てきたクラリッサの死の文書に関してもいえるであろう。彼女は、自己の死を文書化することによって、私的な死という出来事を公的なレベルにまで引き上げ、小説のなかで普遍化する。彼女の死は、そうした文書のもつ公的で客観的な証拠としての力によって、社会的な事件へと変貌を遂げるのである。

こうして、クラリッサは、文書化を通じて公的な存在になることによって、確固たる、一貫した、揺るぎない権力を手に入れることになる。しかし、最後にもう一度指摘しておかなければならないのは、この場合、彼女の自己はどこまで主体性をもっているのかという点である。公的なものとして、彼女の死は、ラヴレイスの死に終わりを求めた。しかし、そのとき彼女の私的なレベルでの死は、どこに行ってしまったのだろうか。確かに、彼女は、文書化、歴史化されることによって、圧倒的な権力を手に入れ、この小説を、ラヴレイスの死という公的なレベルで終わらせることができた。しかし、そのとき、彼女が手に入れた力は、どこまで彼女自身のものなのだろうか。彼女が、公的、社会的なものになるのは、同時に、自己以外の他者の介入によって、彼女の自己が分断された結果なのである。そこでは、もはやどこまでが彼女の主体であり、どこまでが社会という他者なのか判然としない。彼女の死に認められる宗教的な文脈において、死の床で彼女が語っている声は、彼女自身の意志で発せられたというより、むしろ、何か別のものによって彼女が語らされているものだと考えられるのである。彼女がまさに息を引き取る場面で残した次のような言葉は、

このことを端的に示してくれる。

... she spoke faltering and inwardly: Bless — bless — bless — you all — and now — and now (holding up her almost lifeless hands for the last time) — come — Oh come blessed Lord — JESUS !

And with these words, the last but half-pronounced, expired: such a charming serenity over-spreading her sweet face at the instant as seemed to manifest her eternal happiness already begun. (1362)

ここでベルフォードによって、周りの者に慈悲の心を示し、そして、神に祈りを捧げながら静かに死んでいく、天使の美しさをもった女性として描かれているクラリッサの、その死の瞬間発せられる“come”という言葉から少なくとも二つの響きを聞き取ることができる。まず、宗教的かつ性的な達成、エクスタシーの響きである。すなわち、この瞬間に彼女は、天国でキリストと結ばれたとする考え方である。しかし、そう考えることには少々不都合な点がある。J. H. ハグストラムによると、クラリッサが、父である神を指向することはありえても、キリストを夫にすることは考えにくい。なぜなら、この最後の発話でその名を呼びながらも、それまで彼女は「めったにキリストに呼びかけない」ばかりか、彼女が最も親しんだのはヨブ記と詩編であり、「めったに新約聖書から引用されることがないのは奇妙なことだ」⁽²²⁾ といえるからである。そうしてみると、彼女の最後の言葉は、微妙にはあるが、彼女の宗教的な言説の一貫性を曖昧にしているといえる。あるいは、極端な解釈として、ここから、単に性的なニュアンスだけを聞き取るとしても、⁽²³⁾ 公的な、彼女の殉教者としての純粋な精神性を損なうだけである。

この言葉から聞き取れるもう一つの響きは、J. デリダのいう「黙示録的な“come”」の響きである。⁽²⁴⁾ それは、言葉のなかの語調、身振りであり、文法的、語学的な分析では記述し得ないものであって、あらゆる声を引き入れ、すでに何かの反響したものでしかない。そして、外部が内部にあり、内部が外部にある、「黙示なき黙示録」であるこの“come”において、もはや誰が語って

いるのか決定することは不可能なのである。このことを、死に至るクラリッサの次第にその語調を強めていく宗教的言説のすべてについて当てはめることができるであろう。自らの死を決意し、ひたすら殉教者としての死を望む過程において、彼女が宗教的かつ公的な言説に身を寄せた、まさにその瞬間から、彼女の語る言葉は、もはや彼女独自のものではないのである。それゆえに彼女は公的な存在としての権力を手に入れることができるのだが、そのとき彼女の私的な自己も消滅してしまう。そして、そのなかで彼女が残す死の文書は、すでに何らかの他者の声の反響したものでしかない。彼女が、自らの死を文書化して手に入れた絶対的な権力、この『クラリッサ』という小説の終わりで自らの勝利を確立してくれる文書の力は、皮肉にも、彼女を非人称化し、霧散させる。その結果、『クラリッサ』の終わりにおいて、もはやクラリッサの声が聞かれることはないのである。

※本稿は日本英文学会中部地方支部第43回大会（1990年10月6日、福井大学）において口頭発表したものをもとに加筆・修正を施したものである。

注

- (1) Frank Kermode, *The Sense of an Ending: Studies in the Theory of Fiction* (New York: Oxford UP, 1967) 6-7.
- (2) 本書からの引用はすべて、*Clarissa*, ed. Angus Ross (Harmondsworth: Penguin, 1985) による。以下、引用の直後に頁数を示す。
- (3) Terry Eagleton, *The Rape of Clarissa: Writing, Sexuality and Class Struggle in Samuel Richardson* (Oxford: Basil Blackwell, 1982) 49-51. Also see Michel Foucault, *The History of Sexuality*, vol. 1, trans. Robert Hurley (New York: Vintage Books, 1990) 92-102; Gilles Deleuze, *Foucault*, trans. Seán Hand (Minneapolis: U of Minnesota P, 1986) 70-93.
- (4) John Carroll, ed., *Selected Letters of Samuel Richardson* (Oxford: Clarendon, 1964)

クラリッサの死と文書化

- 95-96.
- (5) John A. Dussinger, "Conscience and the Pattern of Christian Perfection in *Clarissa*," *PMLA* 81 (1966): 236-46; Mary Poovey, "Journey from This World to the Next: the Providential Promise in *Clarissa* and *Tom Jones*," *ELH* 43 (1976): 300-15.
- (6) Patricia Meyer Spacks, *Desire and Truth: Functions of Plot in Eighteenth-Century English Novels* (Chicago: U of Chicago P, 1990) 63-64.
- (7) このことが、単純に男性に対する女性の勝利を意味するとは、必ずしもいえない。
(Eagleton 52-54)
- (8) Spacks 70-71.
- (9) Terry Castle, *Clarissa's Ciphers: Meaning and Disruption in Richardson's "Clarissa"* (Ithaca, NY: Cornell UP, 1982) 138-145.
- (10) Eagleton 75.
- (11) Michel Foucault, *The Order of Things: an Archaeology of the Human Sciences*, trans. Tavistock Institute (New York: Vintage Books, 1973) 299-300, 304.
- (12) Linda S. Kauffman, *Discourses of Desire: Gender, Genre, and Epistolary Fictions* (Ithaca, NY: Cornell UP, 1986) 150.
- (13) Michael McKeon, *The Origins of the English Novel, 1600-1740* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1987) 75-76.
- (14) ヨブ記の物語の主題に関しては『旧訳聖書 ヨブ記』関根正雄訳(岩波文庫, 1971) 223-27参照。
- (15) Dussinger 240.
- (16) E. R. Napier, "'Tremble and Reform': the Inversion of Power in Richardson's *Clarissa*," *ELH* 42 (1975): 219, 222.
- (17) Thomas O. Beebee, "*Clarissa*" on the Continent: Translation and Seduction (University Park, Penn: Pennsylvania State UP, 1990) 86-90.
- (18) しかし、T. キャッスルは、シンクレア夫人とクラリッサの死を比較して、両者とも分断のイメージを示している点で共通すると考える。(Castle 32-37)
- (19) Beebee 91-94.
- (20) Kermode 51.

- (21) William Ray, *Story and History : Narrative Authority and Social Identity in the Eighteenth-Century French and English Novel* (Oxford : Basil Blackwell, 1990) 179-83. Also see Eagleton 51-52, 74 ; Christina Marden Gillis, *The Paradox of Privacy : Epistolary Form in "Clarissa"* (Gainesville : UP of Florida, 1984) 59-75, 118-36.
- (22) Jean H. Hagstrum, *Sex and Sensibility : Ideal and Erotic Love from Milton to Mozart* (Chicago : U of Chicago P, 1980) 208.

- (23) クラリッサの死を、以下のラヴレイスの死の様子と比較することができる。

... a strong convulsion prevented him for a few moments saying more — But recovering, he again with great fervour (lifting up his eyes, and his spread hands) pronounced the word *Blessed* — Then, in seeming ejaculation, he spoke inwardly so as not to be understood : at last, he distinctly pronounced these three words,

LET THIS EXPIATE !

And then, his head sinking on his pillow, he expired ; at about half an hour after ten. (1488)

クラリッサの死を単に性的なエクスタシーとして解釈し、また、ここで“a strong convulsion”と“ejaculation”を伴って死んでいくラヴレイスの様子を、明らかに宗教的な含意は認められるにしても、男性の性的な達成であると解釈してみた場合、かなり隔たったところで提示される二人の死の場面を結びつけて理解することが可能となる。

- (24) Jacques Derrida, “Of an Apocalyptic Tone Recently Adopted in Philosophy.” trans. John P. Leavey, Jr., *Oxford Literary Review* 6 . 2 (1984) : 3 -37.